

(様式4)

都道府県名	山口県	番号	35
ふりがな 学校名	しものせきしりつならざきしょうがつこう 下関市立榎崎小学校		

## 1. 研究の概要

(1) 研究主題 「伝え合う力」を高める国語の授業づくり

～話すこと・聞くことの力を高める指導の工夫～（19年度）～書く力を高める指導を通して～（20年度）

(2) 研究のねらい

- ・「話すこと・聞くこと」の領域に視点をあてた指導法を工夫することで、お互いの思いや考えを積極的に「伝え合える力」を高めていく。（19年度）
- ・思考力、表現力の基盤となる言葉の力をつけるために「書くこと」に視点をあて、より確かな「伝え合う力」を高めていく。（20年度）

(3) 19年度の取り組み

① 児童の実態に即した取り組みの重点化を図る。

ア 児童の実態把握（学年末 CRT検査の実施・分析 めざす児童像の設定）

イ 家庭向け実態アンケートの実施（生活習慣 学習習慣 読書週間 等）

ウ 学期ごとに児童の実態及び具体的方策の見直し（7月 12月）

② 各ブロックの研究の視点に基づいた校内授業研究会を実施する（年間7回）。

③ 国語力を向上させるための具体的な手だてについて協議し実践する。

ア 表現活動の場の設定

- ・こだま会 年5回：全校児童の前で、話す場 気付きや感想を交流する場

イ 読書活動の推進

- ・読書コーナーの充実 ・ブックトーク ・選書会 ・図書の電算化 ・朝読書（週1回）

ウ 評価活動の充実

- ・児童による自己評価 ・保護者による授業評価 ・教師間評価



(4) 19年度の改善点を生かした本年度の取組

① 深まりのある伝え合いに向けて

- ・伝え合う力のもとになる言語の力をつける手立てとしての「書く力」の向上
- ・フリートーク 週1回（15分）：話題提供者の提案をめぐって参加者が自由に話し合う活動
- ・こだま会での意見交流の充実（時間の確保）

② 研究の深化充実と授業改善に向けて

- ・全員授業公開と全授業指導者を招聘しての受指導（年6回）
- ・CRT検査の分析方法についての研修（講師招聘）

③ 保護者との情報の共有及び連携

・生活習慣についての家庭向け実態アンケートの実施（学力と生活習慣）と学力向上に向けた提案（榎崎小学校発、4つのモーション：十分な睡眠 家族団欒での食卓 テレビとゲームのない時間 自主的な家庭学習

- ・学びの約束（学校での学習習慣）の振り返り
- ・保護者による授業評価と結果の公表

④ 読書活動の推進

- ・必読書の選定（各学年20冊） ・ふれあい文庫の設置（PTA運営） ・休業中の図書館開館

・図書貸し出しの推進（週末・休業中）

⑤ 個に応じた指導

・パワーアップ教室：基礎学力の向上を目指して、夏季休業中に実施

## 2. 成果

- (1) 音声言語で表現することへの抵抗が少なくなり、話し手の思いを感じ取りながら聞くことができる子どもが増えてきた。同時に、友だちと比べたりつなげたりして話すこともできるようになってきた。また、児童の実態に応じた「書く」活動を取り入れることで、文の書き方や情報収集力・文章構成力が身についてきた。
- (2) 読み聞かせやふれあい文庫など本に触れる機会を多く設けることで、読書への関心・意欲が高まった。
- (3) 家庭に協力を要請し、学校と家庭が連携を図ることで、生活習慣を見直すことができるとともに、学習習慣が改善し、学習意欲が高まってきた。

## 3. 成果についての検証

- (1) 表現することに関しては、こだま会や日々の学習のなかで表現する場を意図的に設定し、また、具体的なよさについて教師が認め、児童相互がを見つけ合う中で、自信をもって表現できるようになり、表現内容も豊かになってきた。国語学習に関する児童への意識調査をしたところ、国語学習への興味が高まってきている（H19 88% H20 93%）。作文や日記・俳句・一人学び等書く活動を工夫して取り入れることで、書くことに対する関心も高まってきている。3学期に実施したC R T検査で顕著な成果は表れなかったが、C R Tの見方に関する研修をしたことで個々の課題が把握でき、より焦点化された指導が可能になった。
- (2) 読書活動については、すぐに手に取ることができる本が身近にあるという環境づくりをすることで、本を読むという行為が子どもたちにとって自然なものとなってきたように思う。  
児童の意識調査の結果を見ても、「本を読むのは好きですか。」という質問（4段階）に対して「はい だいたい」と答えた児童は全体の98%（昨年度は82%）だった。また、「本を読もう」というチャレンジ目標の達成率が年々高まってきている（H19 54%→H20 68%）。
- (3) 生活習慣の改善については、学力の向上と生活習慣の関係性を保護者に知らせ、児童の実態をもとに今後の改善点について保護者に啓発することで、家庭での生活習慣を見直す契機となり、昨年度に比べてずいぶん改善された。

・睡眠時間について（10時までには就寝）	66%（H19）→72%（H20）
・一家団欒のある食事（食事の際のテレビを見ていない）	16%（H19）→28%（H20）
（学校の出来事についての話をしている）	72%（H19）→83%（H20）
・ゲームとインターネットについて（平日に1時間以内）	52%（H19）→75%（H20）
（ルールを決めている）	49%（H19）→68%（H20）

学校での学習習慣(学びの約束)についても、月末に児童が自己評価し、変容について参観日に保護者と教師が具体的評価をすることで児童自身の意識が高まってきた。

## 4. 課題とその改善

成果について述べてきたが、まだまだ課題も多い。C R T検査の結果を見ても「話すこと・聞くこと」「書くこと」について思ったほど成果が上がっていなかったり、読書活動について学校での読書習慣が家庭ではまだまだ定着していなかったりといったことなどがあげられる。

新学習指導要領では言語活動の充実がキーワードとなっているが、「言葉の力」をより高めていくためにC R T検査の結果等、児童の実態を分析をした上で一人ひとりに応じた適切な指導を施す必要がある。また、家庭とも児童の実態や取り組みについての情報を共有し、学校・家庭・地域がさらに連携を深めながら国語力の向上をめざしていきたい。

この2年間の取り組みの成果をもとに、これからもさらなる児童の変容をめざし、課題解明にむけて研究を進めていきたい。